

# 教育研究業績書

2017年10月20日

所属：心理・社会福祉学科

資格：教授

氏名：小花和 W. 尚子

研究分野	研究内容のキーワード
発達心理学 心理的ストレスとレジリエンス	心理的ストレス レジリエンス
学位	最終学歴
博士（学術）、教育学修士	神戸大学大学院 総合人間科学研究科 博士後期課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 習熟度別演習授業	2007年4月	心理学英語文献講読では、初回授業で独自のプレイズメントテストを実施し、習熟度別に受講生を分け、複数の教員が順次グループを担当している。最終授業ではアチーブメントテストを実施し、両テスト結果も成績に反映させることによって自主学習へ動機づけている。この実践について、FD推進委員会「大学授業研究プロジェクト」授業実践事例報告（再掲）において報告した。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 心理学英和・和英基本用語集	2010年3月	「心理学英語文献講読」の授業において使用する用語集として、一般の英和辞書には載っていない心理学専門用語1644、心理学者名223をとりあげ、その英和と和英辞書を学会内の他の教員とともに編集し、福村出版より出版した。
2. 平成21年度心理学用語集	2008年04月	心理学英語文献講読 I & IIの副教材、および卒論作成のための英語論文講読や大学院進学準備のための自主的学習の参考書として、学科内で授業を担当する教員が中心となって英語心理学用語の和訳集を作成した。
3. 心理学英語論文資料集	2007年04月～	心理学英語文献講読 I および心理学英語文献講読 II の教材として、各年度の担当教員が、本学科受講生の英語レベルにあった資料を選択し、年度ごとに新たに作成を行っている。
4. 心理統計法	2007年04月～2010年	心理統計法の担当者3名が独自に授業教材を作成し冊子として講義で使用した。
5. ビデオ分析学習用教材	2004年04月	人間観察に基づくデータ収集の方法について学習するために、研究データをサンプルとしてビデオ分析のための視聴覚教材およびその分析ツールを作成し活用した。
6. テキスト心理学	2000年3月	心理学の基本的な領域について、日常の出来事と関連させながら概説し、ミネルヴァ書房より出版した。担当章では、発達の概念、親子関係の重要性、自我の芽生え、対人関係の広がりについて述べた。その中では、近年の親子関係や子どもの遊びに見られる問題点の指摘と解説を行った。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. METI主催 インドネシア海事教育機関教員教育スキル向上研修 講師	2011年1月28日2011年2月6日	METI（インドネシア国立船員教育機関教官能力向上プロジェクト）の一環として、インドネシア海事教育機関教員を対象に、教育および集団マネジメントに関する心理学の研修を行った。
2. 武庫川女子大学発達支援学術研究センター平成21年度第2回公開講座 講師	2009年10月24日	武庫川女子大学発達支援学術研究センターにおける平成21年度の成果公開として、「発達障害児をもつ親のストレスー児童機までを中心にー」というタイトルのもとで、調査結果の概要を公開した。
3. ひょうご講座2006春期 心理学のおもしろさ アラカルト 講師	2006年5月31日	ひょうご震災記念21世紀研究機構学術交流センター主催による社会教育講座において、「発達心理学」の講義を行った。
4. ひょうごオープンカレッジ 講師	2003年7月24日	ひょうご震災記念21世紀研究機構学術交流センター主催による社会教育講座において「ストレスとともに生きる」と題して心理的ストレスに関する講義を行った。
5. 篠山市安全衛生委員会主催 メンタルヘルス講習会 講師	2003年11月11日～14日	篠山市職員メンタルヘルス事業の一環として、職員を対象にストレスマネジメント研修を行った。
6. 大阪府四條畷府民健康プラザ（四條畷保健所）在宅難病患者家族に関わる職員研修会 講師	2001年9月26日	在宅難病患者家族に関わる関係機関職員（看護師、保健士）を対象として、「リラクゼーションと緩和的アプローチ」と題してストレスとレジリエンスの理解に向けた研修を行った。
7. 日本心理学会国際学会発表のための講習会 講師	1999年9月6日	日本心理学会第60回大会で学会員を対象として国際学会での発表に関する講習を行った。
8. 日本発達心理学会国際学会発表ワークショップ 講師	1999年3月27日	日本発達心理学会第10回大会で学会員を対象として国際学会での発表に関する講習を行った。
9. 神戸市私立幼稚園連盟主催 「心のケア」教員宿泊研修会 講師	1996年12月13日～14日	神戸市私立幼稚園連盟による「心のケア」研修事業として、1泊2日の研修会で「母子関係における心のケア」と題して講演を行うとともに、現役の幼稚園教諭が抱える保育現場での個別の問題についてアドバイスを行った。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
。		
<b>4 その他</b>		
1. 武庫川女子大学附属高等学校 総合的な学習の時間 講師	2014年2月4日	「心理学概論」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
2. 四条啜学園高等学校 模擬授業 講師	2012年11月16日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
3. 武庫川女子大学附属高等学校 総合的な学習の時間 講師	2011年5月21日	「心身の健康とストレス」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
4. 武庫川女子大学附属高等学校 総合的な学習の時間 講師	2011年2月1日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
5. 兵庫県立津名高等学校 模擬授業 講師	2011年12月21日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
6. 兵庫県立川西北陵高等学校 模擬授業 講師	2008年7月11日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
7. 兵庫県立赤穂高等学校 模擬授業 講師	2007年11月7日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
8. 兵庫県立鈴蘭台西高等学校 模擬授業 講師	2004年12月21日	「心理学入門」として高校2年生を対象に出張講義を行った。
9. 兵庫県立西宮甲山高等学校 模擬授業 講師	2003年10月3日	「乳幼児期の発達段階」として高校3年生を対象に出張講義を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 幼稚園教諭1級普通免許	1987年03月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 兵庫県人権教育研究協議会 地域に学ぶ人権学習資料開発委員会 委員	2009年8月1日～2010年3月31日	兵庫県より人権学習資料開発委員会委員に委嘱され、人権学習の年度計画および教材開発計画の考案に携わった。
2. 大東市総合計画審議会 委員	2000年7月1日～12月31日	大東市より総合計画審議会委員に委嘱され、市政策に教育・研究経験を活かした学術的視点の提供を行なった。
<b>4 その他</b>		
1. 日本教育心理学会 学会誌「教育心理学研究」常任編集委員	2011年1月1日～2013年12月31日	
2. 日本生理人類学会 評議委員	2003年4月1日～2005年3月31日	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 新保育ライブラリー保育心理学	共	2009年09月	北大路書房	無藤隆・清水益治（編）・無藤・小花和・橋本・刑部・松村・寺見・向後・他 担当：pp. 9～16（初版は2002年出版） 本書は、乳幼児の保育のために有益な心理学の知見を整理して提供することにより、保育現場での諸問題に対する解決の糸口を探ろうと試みた解説書である。担当章では、発達心理学の知見から、乳幼児期の心理的ストレスの特徴と機能、およびレジリエンスの概念説明を行ない、保育現場での実践的応用について解説を行なった。
2. 幼児期のレジリエンス	単	2004年02月	ナカニシヤ出版	本書は、幼児期の心理的ストレス研究における視点の転換と課題の解決に向けて、レジリエンスという新しい概念を導入し、縦断的データのもとに幼児の心理的ストレスの特徴分析とその軽減方法の検討を行った学術書である。平成14年3月に神戸大学大学院に提出した博士学位論文に基づき加筆・修正し、日本学術振興会2003年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）学術図書助成を受けて刊行した。全（pp. 144）
3. テキスト心理学	共	2000年03月	ミネルヴァ書房	橋本憲尚・待田昌二・河村壮一郎・佐藤浩一・山崎晃男・中村真・和田万紀・堀田美保・川中紀子・小花和Wright尚子・三川俊樹・山本恵子 担当：pp. 240～262 本書は、心理学の基本的な領域について、日常の出来事と関連させながら平易に理解させることを目的としたテキストである。担当章では、発達概念、親子関係の重要性、自我の芽生え、対人関係の広がりについて述べた。その中では、最近の親子関係や

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
4. 阪神・淡路大震災と子どもの心身 —災害・トラウマ・ストレス—	共	1999年07月	名古屋大学出版会	<p>子どもの遊びに見られる問題点の指摘と解説を行った。</p> <p>山田富美雄・竹中晃二・服部祥子・島井哲志・大谷昭・山中久美子・上野昌江・百々尚美・大野太郎・佐伯恵子・小花和Wright尚子・野田哲朗・岡本正子・引野明子 担当：pp. 165～180</p> <p>精神医学・心理学・看護学の専門家による阪神・淡路大震災後の調査活動を通じて、子どものストレス反応に関する提言を述べた専門書である。担当章では、阪神・淡路大震災後3年間にわたる幼稚園児および母親へのストレス調査の総括的報告を行い、子どものストレス反応とレジリエンスの関連から母子関係への具体的援助について提言を行った。</p>
5. Recent Advances in Physiological Anthropology	共	1999年01月	Kyushu University Press	<p>Masahiko Sato・Hiromi Tokura・Shigeki Watanuki・他多数 担当：pp. 231～244</p> <p>第3回国際生理人類学会における講演および発表より、学会によって選定された研究を集録した学術専門書である。担当章では、阪神・淡路大震災後2年間にわたる幼稚園児および母親へのストレス調査の総括的報告およびノンパラメトリック解析分析結果の報告を行い、将来的視野をもった調査継続が必要であること、また母子ストレスマネジメントの開発が急がれることを提言した。</p>
6. シリーズ医療の行動科学 I 医療行動科学のためのミニマム・サイコロジ—	共	1997年08月	北大路書房	<p>山田富美雄・桐村雅彦・大西久男・福田恭介・原口雅浩・浅田博・大平英樹・田中裕・土肥伊都子・池田京子・津田彰・津田茂子・平伸二・志和資明・岡本真彦・皆川直凡・小花和尚子・大野太郎・森下温美・水谷充良・保野孝弘・高辻功一・百々尚美・赤井俊幸・寺下裕美・尾関有佳子・玉木敦子・野田哲朗・堤俊彦・佐藤豪・片柳弘司・記谷康之・長谷川芳典・玉木彰・末原紀美代・竹中麻理子 担当：pp. 118～119, pp. 120～121, pp. 122～123, pp. 126～127</p> <p>高齢化社会、環境破壊が進む今日の社会では、医療関係者も今後担うべき役割と進むべき方向性を求めて模索している。本書は、その過程において、医療の対象となる人々のまたは医療関係者自身の行動理解に向けて、心理学的知見を提供した学習専門書である。担当章では、医療現場で貢献できようであろう発達心理学的知見について、医療従事者を対象として解説を行った。</p>
7. 乳児保育総論	共	1997年04月	保育出版社	<p>川原佐公・里美恵子・今泉利・服部敬子・新治玲子・初塚真喜子・菊野春雄・楽木章子・中島ナオミ・詫摩元子・高内正子・新山裕恵・古橋紗人子・大方美香・井上裕子・濱田敦子・小花和尚子・尾崎嘉子・森宇多子・川原佐公・富永仁志 担当 pp. 126～130</p> <p>乳幼児保育関係者に保育に関する最新情報を提供することを目的とした専門書。担当章では、今日の保育者が担うべき新たな役割について、少子化、幼児虐待などの社会問題を取り上げながら論じた。まず、保育者自身が自己育成に向けての啓蒙を行うことがその第1歩であり、その上で、保育ソーシャルワーカーとして、また地域コミュニケーションのコーディネーターとしての専門能力を備えることが重要であると提言した。</p>
8. 心理学者がみた阪神大震災 一心のケアとボランティア	共	1996年2月	ナカニシヤ出版	<p>城仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子（編著） 城仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子・永田素彦・森永壽・八ツ塚一郎・渡邊としえ 担当：編集，第4章「災害後の幼児と母親のストレス」pp124-162. 第5章「被災した子ども・母親，災害研究者に必要なもの」pp164-175.</p> <p>阪神・淡路大震災後の神戸市・西宮市において、心のケアとボランティア活動を行った心理学者の実践活動報告を通じて、今後の心理学が課題とすべき問題について論じた。担当章では、幼児期における災害ストレス調査の必要性と、幼稚園単位での母子ストレスマネジメントの重要性について、調査データ分析結果および臨時的面談結果より提言した。また、今後の心理学者が災害研究時に要求される臨床的姿勢についての意見を述べた。</p>
9. 阪神・淡路大震災 その時学校は—検証と未来への提言—	共	1995年10月	六甲出版	<p>神戸市PTA協議会復興委員会（編著） 神戸市PTA協議会，増井弥生・芝由美子・速水順一郎・小花和尚子ほか4名 担当：第3章第3節「震災ストレス調査」pp142-149</p> <p>阪神・淡路第震災後の神戸市内において、各小学校</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
				およびPTAが行った支援活動について、小学生たち自身の証言を交えながら記録を総括した。担当章では、幼児の震災ストレス調査結果を示しながら、子どもの災害ストレスケアの必要性および必要とされる今後の支援について提言を行った。
<b>2 学位論文</b>				
1. 幼児期の心理的ストレス反応とレジリエンス	単	2002年3月	神戸大学大学院総合人間科学研究科	本研究では、3年間にわたる縦断的調査結果および母親と保育者への面接調査結果より、レジリエンスという新しい概念を導入した家庭と保育現場の相互支援について実証的検討を行い、幼児期の心理的ストレス研究の現状における課題の解決と視点の転換に向けて提案を行った。
<b>3 学術論文</b>				
1. 子どもへの歌いかけと母親の育児自己効力感の関連（査読付）	共	2016年9月	小児保健研究, 75, 552-558.	諸岡由依・小花和 Wright 尚子 担当：調査実施指導・データ分析 歌いかけが、母親の育児自己効力感を向上させ、気分を安定させるか検討を行った。0歳から1歳の子どもの母親を対象に質問紙調査、さらに1週間の子どもへの歌いかけ実践を行った結果、子どもに歌いかける頻度が、他の母親に比べて多いか少ないという自己評価は、育児自己効力感と関連することが示された。
2. 幼児期のレジリエンスと虐待	単	2016年2月	日本子ども虐待防止学会 子どもの虐待とネグレクト, 17, 340-345.	幼児期の被虐待経験による発達的な長期的影響とそれに対するレジリエンスに関して、文献レビューを行い、実践的介入に向けて、研究上の限界および理論的枠組みからこそ得られる利点について検討を行った。
3. 情報環境による情報リテラシーへの影響（査読付）	単	2014年7月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, Vol. 22, 1-6.	大学に入学するまでの情報環境と情報リテラシーの関連について、新入生を対象とした2011年度から2013年度までの調査結果から検討を行った。分析の結果、3年間を通じて、情報リテラシーに「携帯電話」、「スマートフォン」の利用は関連していなかった。インターネットに接続されていないパソコンを利用している場合、あるいは、パソコンでタイピングを必要とするメール、SNS、ブログを使用しない場合には、情報リテラシーは低い傾向にあることが示された。
4. オンライン課題への取り組みがeラーニング学習への肯定的態度、学習効果へ及ぼす影響（査読付）	共	2013年6月	情報コミュニケーション学会誌, Vol. 9, No. 1, 14-22.	小花和 Wright 尚子・中野彰 担当：論文執筆、調査内容検討、データ分析 ブレンド型eラーニングによる情報リテラシー関連授業における学習効果に、学習動機づけと課題への取り組みが及ぼす影響を検討した。構造方程式によってモデル検証を行った結果、eラーニングに対する肯定的態度および課題に対して見いだす本質的価値は反復学習を促進し、学習に対する目標志向は日常での情報リテラシーの活用に影響を与え、それらの結果として学習効果が発揮されることが明らかとなった。
5. 就学前幼児の唾液中αアミラーゼ活性と意欲との関連（査読付）	共	2012年05月	小児保健研究, 71 360-365.	小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 担当：論文執筆、調査内容検討、データ分析 5歳児の舌下腺唾液中αアミラーゼの測定を、携帯型測定装置（αAmy）によって3ヶ月間継続的に行い、日内変動、平均活性値の個人差に関連する要因を検討した。聞き取り調査から、子どもの達成意欲が関連することが示された。
6. ブレンド型eラーニングにおける学習動機づけが課題取り組みと学習効果に及ぼす影響	共	2011年12月	武庫川女子大学情報教育研究センター年報, Vol. 19, 8-11.	小花和 Wright 尚子・中野彰・福井哲夫・松浦寿喜・黒田幸弘 担当：論文執筆、調査内容検討、データ分析 ブレンド型eラーニングによる情報リテラシー関連授業における学習効果に、学習動機づけと課題への取り組みが及ぼす影響を検討した。
7. eラーニングによる授業への印象と情報リテラシーの関連	共	2009年12月	武庫川女子大学情報教育研究センター年報, Vol. 17, 10-13.	小花和 Wright 尚子・中野彰・福井哲夫・松浦寿喜・三井正也 担当：論文執筆、調査内容検討、データ分析 eラーニングによる情報関連科目の学習へ印象が、情報リテラシーの向上に与える影響を検討した。2009年度は、知識課題をベースとしたテキストとコンテンツを独自に開発し、ブレンド型eラーニングによる授業を実施した。また、情報活用の基礎関連科目において、開始前にプレテストと授業アンケートを実施した。以上のデータを分析した結果、情報関連の知識習得には、eラーニングにおけるコンテンツへの興味・関心に関連することが明らかとなった。
8. 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス（査読付）	単	2002年02月	日本生理人類学会誌, Vol. 7, No. 1, 25-32.	幼児期の心理的ストレス研究の現状における問題を、最近の児童期以降の心理的ストレス研究結果、および発達心理学、保育学、発達精神病理学における研究結果から検討し、心理的ストレス研究における

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
9. 母親と幼児の心理的ストレス相互作用への介入の試み	単	2001年05月	四条啜学園短期大学研究論集, 34, 30-44.	視点の転換と残された課題の解決に向けて、レジリエンスという新しい概念を導入することの有効性を論じた。
10. 幼稚園における幼児と母親を対象とした災害ストレス・マネジメント支援	共	2001年03月	神戸大学都市安全研究センター研究報告, 5, 237-250.	幼稚園児をもつ母親への個別面接を通じて、母親の子どものストレス反応についての認知変容を試み、その変容が母親の心理的ストレスと子どものレジリエンス、および保育者と母親の関係性に与える影響を検討した。事例研究結果より、保育者と母親の関係性は、子どものストレス反応に影響を与えるレジリエンス要因として重要であることが明らかとなった。
11. 幼児期の災害ストレスに対するマネジメント研究—就学前から就学後にかけての精神的健康に災害が及ぼす影響—	共	2000年05月	マツダ財団研究報告書(青少年健全育成関係), 13, 1-10.	小花和Wright尚子・城仁士 担当：論文執筆, データ分析 幼児期の心理的ストレスを軽減するために神戸市内幼稚園において実践されている保育内容を調査・分析し、日常保育活動の中で実施できるストレスマネジメント教育として、リラクゼーションプログラムの開発を行った。幼児自身を対象としたプログラム効果の分析より、幼児の心理的ストレスには、プログラムの内容とともに保育者との関係が重要であることが明らかとなった。
12. 幼児のストレス反応とレジリエンス	単	1999年12月	四条啜学園女子短期大学研究論集, 33, 47-62.	幼児に適用可能なレジリエンス尺度の開発を目的として、レジリエンス概念のレビューとストレス反応尺度との対応を検討した。調査分析結果より、現在のところ、成人用として開発されている尺度は、幼児の年齢ごとに改訂される必要があるものの、ストレス反応を軽減する指標として適切であることが示された。
13. 震災ストレスにおける母子関係(査読付)	単	1999年02月	日本生理人類学会誌, Vol. 4, No. 1, 17-22.	阪神・淡路大震災後3年間にわたって、幼稚園児および母親を対象として行った第1回～第4回災害ストレス調査のノンパラメトリック解析分析結果より、幼児期の心理的発達にとって、母親との関係形成とレジリエンスの育成が重要であることを示した。
14. 幼児期におけるストレス・マネジメント教育の試み	単	1998年12月	四条啜学園女子短期大学研究論集, 32, 32-39.	神戸市内幼稚園において試行した幼稚園児用ストレスマネジメントプログラムの実験結果より、幼児期におけるストレスマネジメント教育の実施可能性を示した。
15. 母親と保育者の期待の認知	単	1997年12月	四条啜学園女子短期大学研究論集, 31, 12-19.	保育者と母親が子どもに抱く発達期待には差異があるが、子どもはその差異をどのように認知し自己の行動に反映させているのかについて調査分析を行った。調査結果より、子どもは保育者と母親それぞれの発達期待に合致するよう、両者の前では異なる行動パターンをとろうと意図していることが示され、子どもの行動と発達期待の関連が明らかとなった。
16. 効果的な職務遂行のための職務適性の認知に関する研究(査読付)	共	1997年03月	実務教育研究年報, 3, 7-14.	木村三千世・小花和尚子 担当：データ分析 経済状況が激しく変動する今日、安定した職業生活を継続するためには、効果的な遂行能力を備えていることが必須となっている。一方、効果的な職務遂行が、必ずしも働く人自身の精神的な満足感を生み出しているわけではない。有職社会人を対象とした調査結果から、効果的な職務遂行と精神的ストレスの解消を共存させる必要性、およびそのための企業内システムについて、提言を行った。
17. 職業適性の認知と資質の認知に関する調査報告(査読付)	共	1996年3月	実務教育研究年報, 2, 77-85.	木村三千世・小花和尚子 担当：調査内容検討, データ収集, データ分析, 資料作成 有職社会人を対象とした調査結果より、職業適性および自己の資質に関する認知が、職業継続意思に与える影響を検討した。その結果、職業継続の方向へと意思決定を促進するためには、職業適性に関する認知と自己の資質に関する認知の一致が必要であると示された。
18. 災害後の幼児と母親のストレス	共	1996年10月	神戸大学発達科学部人間科学研究センター人間科学研究, Vol. 4, No. 1, 19-28.	小花和尚子・城仁士 担当：論文執筆, データ分析 兵庫県南部地震による生活の変化が、幼稚園に通う幼児とその母親の心身に及ぼした影響を検討した。1995年4月～5月に行った災害ストレス調査のノンパラ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
19. The influence of toys on preschool children's social behavior (査読付)	共	1995年7月	PSYCHOLOGIA, Vol.38, No.2, 70-76.	メトリック解析による分析結果から、幼児・母親が示すストレス症状の程度と、母親の養育に関するニーズの関連について検討し、母子ストレスマネジメントおよびソーシャルサポートの在り方について提言を行った。 Naoko Obanawa, Hitoshi Joh 担当：論文執筆，データ収集，データ分析 幼児の遊びを媒介する”玩具”の特性，および幼児の社会性レベルと，遊びの中に現れる社会的行動の関連について検討した。その結果，玩具の特性は幼児の遊びのテーマを規定するだけでなく，遊びの中に示される社会性を誘発することが明らかとなった。
20. 阪神大震災による災害ストレスの諸相 (査読付)	共	1995年11月	実験社会心理学研究, Vol.3, No.1, 232-242.	城仁士・小花和尚子 担当：論文執筆（調査II），データ収集（調査II），データ分析（調査II） 兵庫県南部地震による生活の変化が被災者の心身に及ぼした影響を検討した。小花和尚は調査2を担当し，1995年4月～5月に行った幼児・母親を対象とする第1回災害ストレス調査結果の相関分析・アナリシスによる分析を行った。その結果，幼児が示すストレス反応には，年齢および性による質的差異が認められ，その内容によって，母親のストレス反応の強度は影響を受けることが示された。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. Disaster Stress of Children and Mothers after The Kobe Earthquake	単	1996年9月	国際生理人類学会主催公開シンポジウム「ストレスと災害－阪神・淡路大震災に学ぶ近未来の災害対策－」	講演者：山田富美雄・丸山総一郎・Leonard Zaichkowsky・竹中晃二・小林晶子・小花和尚子・奥田豊子・宮野道雄 阪神・淡路大震災後の幼稚園児および母親への第1回、第2回ストレス調査結果を報告し、今後の幼児の精神的健康維持には、将来的視野をもった調査継続が必要であること、日本国内の母子関係に特有な“共生”を考慮した早期の母子ストレスマネジメント開発が急務であることを提言した。
2. 阪神・淡路大震災における”こころ”への影響とその対応	共	1995年12月	平成7年度日本人間工学会関西支部大会	講演者：神戸市消防局・小花和尚子・山田富美雄 阪神・淡路大震災後の幼稚園児および母親への第1回ストレス調査結果の報告を行い，幼児とその母親のストレスマネジメントには，物理的援助を通じた精神的サポートが必要であることを提言した。
<b>2. 学会発表</b>				
1. The maternal affect toward infants during the puerperal period might be correlated with the biomarkers in cord blood.	共	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology 2016	Shigeki Tanaka, Noriko Yamakawa, Kohta Tamai, Kumiko Namba, Megumi Sasaki, Naoko W Obanawa, Masatoshi Kawai, Hatsumi Yamamoto Two hundred one mothers were examined the maternal affect toward infants at discharge of maternity hospital and at first month checkup. Biomarkers such as NK cells, cortisol, endorphin were also measured in cord blood at birth. The concentration of cortisol, endorphin and oxytocin were significantly correlated with several scales for resilience and maternal affect toward infants.
2. The influence of collection and utilization of information related to child-rearing on Japanese mothers' mental health	共	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology 2016	Ken'ichi Matsumura, Naoko W. Obanawa, Mako Masuda As nuclear families increased and the Internet became popular, Japanese mothers were faced with culling adequate information related to child-rearing from an extraordinary amount of information from various media. In this study, we examined the influence of collection and utilization of information related to child-rearing on Japanese mothers' mental health.
3. Influence of association on the measurement of subjective adjustment among Japanese female university students	共	2016年7月	The 31st International Congress of Psychology 2016	Shimazu, Y., Obanawa, N. W. This study examined the influence of association on the measurement of subjective adjustment among Japanese female university students. The role of interpersonal relationships for subjective adjustment is discussed.
4. The influence of personal experiences on attitude towards life and death among Japanese adults	共	2014年7月	The 23th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioral Development 2014, Abstract, P2. 68.	Tanaka, N., Obanawa, N. W., Saito, S., Joh, H. division: proofreading People's attitudes towards life and death are one set of key components determining their behaviors related to health and life. However, not much is known about those of Japanese in adulthood. This study aimed to examine personal experiences that influence Japanese adults' attitude

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
5. システムズアプローチからみた発達過程(1)	共	2014年3月	日本発達心理学会第25回大会論文集, p594.	des towards life and death. 難波久美子・河合優年・佐々木恵・小花和 W尚子・山本初実・山川紀子・田中滋己・玉井航太 乳幼児を対象としたコホート研究のデータ分析結果から、社会性発達の個体差を説明するモデルを検討し、その提案を行った第1報である。
6. 大学生の生と死に対する態度とゲーム体験の関連	共	2014年11月	日本教育心理学会第56回総会発表論文集, p545.	小花和 Wright 尚子・中谷有里 担当：発表、データ分析 大学生を対象に生と死に対する態度とゲーム体験との関連を検討し、育成型、戦闘型などのゲームタイプの選択が、生と死に対する態度と関連することを示した。
7. 出産経験が女性の共感性に与える影響	共	2012年9月	日本心理学会第76回大会, 発表論文集 p1046.	田中美帆・小花和 Wright 尚子 担当：文章校正 成人前期の女性を対象に、出産経験が女性の共感性に与える影響を検討した。他者指向的な共感性は、初産か経産かに関わらず、出産後に高まることが示された。一方、自己指向的な共感性の情動面である「個人的苦悩」については、経産婦では出産後に低下し、初産婦よりも有意に低くなることが示された。
8. 出産経験が女性の生と死に対する態度に与える影響	共	2012年11月	日本教育心理学会第54回総会, 発表論文集, p315.	田中美帆・小花和 Wright 尚子 担当：文章校正 出産を経験した成人期女性を対象に、妊娠・出産経験が生と死に対する態度に与えた影響を検討した。妊娠・出産を経験した女性の生と死に対する態度では、その出産経験が初産か経産か、あるいは妊娠中に切迫早産・切迫流産などの命に関わる出来事を経験したかに関わらず、「死に対する恐怖」、「生を全うさせる意志」、「人生に対して死が持つ意味」は高まることが明らかになった。出産を経験した女性は人生に対して死が肯定的な作用を持つと考える傾向が強い一方で、死に対する恐怖も強くなったと考えられ、アンビバレントな生と死に対する態度を持つと推察された。
9. 唾液中αアミラーゼの個人差(2)	共	2012年11月	日本心理学会第76回大会, 発表論文集, p915.	小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 担当：データ収集, データ分析, 抄録執筆 日本人女性における唾液中αアミラーゼおよびコルチゾールの日内変動と日内分泌量を測定し、恥の概念との関連を検討した。
10. 養育者によるdifficult behaviorの認知	共	2012年03月	日本発達心理学会第23回大会, 発表論文集, p284.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝・森安真由美 担当：発表, データ分析, 抄録執筆 発達に関わるリスク要因の解明に向けて、健常児および発達障害を診断された子どもの養育者を対象に、子どもの行動に見られるdifficult behavior (扱いが難しい行動)に関する説明帰属スタイルを調査し、診断の有無および発達障害リスクの有無による比較を行った。
11. 唾液中αアミラーゼの個人差—自己意識的感情から—	共	2011年03月	日本心理学会第75回大会, 発表論文集, p899.	小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 担当：データ収集, データ分析, 抄録執筆 日本人女性における唾液中αアミラーゼおよびコルチゾールの日内変動と日内分泌量を測定し、自己意識的感情との関連を検討した。自尊感情はコルチゾール、社会的な自己への意識の低さは、αアミラーゼと関連しており、生理的側面での反応に自己意識的感情が関連することを示した。
12. 唾液中αアミラーゼの日内変動—測定方法による比較—	共	2010年09月	日本心理学会第74回大会, 発表論文集, p495.	小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 担当：データ収集, データ分析, 抄録執筆 舌下腺唾液中αアミラーゼの測定を、携帯型測定装置2種類(αAmy, 唾液アミラーゼモニター)とソリベットによる採取を通じて行い、測定値に見られる日内変動を比較した。唾液アミラーゼモニターによる測定値は、ソリベット採取を通じた測定値よりも変動が小さく日内変動が明らかではなかったことから、個人差を把握する上ではその測定値の意味について考慮が必要であることが示された。
13. 保育者の気になる子どものとらえ方—発達臨床心理学用語に対する認識との関連—	共	2010年03月	日本発達心理学会第21回大会, 発表論文集, p202.	小花和 Wright 尚子・佐方哲彦・羽川可奈子・則定百合子・井上雅勝・井関良美 担当：抄録執筆 学術論文「保育者の気になる子どものとらえ方—発達臨床心理学用語に対する認識との関連—」をまとめるにあたり、主要な分析結果と考察について発表した。
14. 母親によるdifficult behaviorの認知	共	2009年09月	日本心理学会第51回総会, 発表論文集, p634.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝・井関良美 担当：データ分析, 抄録執筆 学術論文「発達リスク要因の解明1」をまとめるにあたり、主要な分析結果と考察について発表した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
15. 発達リスク評価法の開発のための基礎研究(2)ーことば・コミュニケーションの問題からー	共	2009年09月	日本心理学会第51回総会, 発表論文集, p430.	羽川可奈子・佐方哲彦・小花和 Wright 尚子 担当: 文章校正 学会抄録「発達リスク評価法の開発のための基礎研究(1)の継続発表。保育者による発達リスク児のとらえ方を自由記述による回答から, ことば・コミュニケーションの側面に着目して分析を行った。
16. 発達リスク評価法の開発のための基礎研究(1)	共	2009年08月	日本心理学会第73回大会, 発表論文集, p1219	佐方哲彦・小花和 Wright 尚子・羽川可奈子 担当: 文章校正 保育者による発達リスク児のとらえ方を自由記述による回答から、多動性・衝動性、攻撃性などの行動側面に着目して分析を行った。
17. 幼児の唾液中αアマラーゼの日内変動と個人差(2)	共	2009年08月	日本心理学会第73回大会, 発表論文集, p990.	小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 担当: データ収集, データ分析, 抄録執筆 5歳児の舌下腺唾液中αアマラーゼの測定を, 各家庭で携帯型測定装置(αAmy)とソリベットによる採取を通じて継続的にを行い, 保育園における発表データとの比較を行った。
18. 幼児の唾液中αアマラーゼの日内変動と個人差	共	2008年09月	日本心理学会第72回大会, 発表論文集, p1030	小花和 Wright 尚子・河合優年・杉本五十洋・山本初実 担当: データ収集, データ分析, 抄録執筆 幼児の唾液中αアマラーゼの継続測定から日内変動、平均活性値の個人差を検討した結果、成人とは異なる日内変化が示された。また日常の活動に対する高い意欲が唾液中αアマラーゼ活性の恒常的な高さに関連する可能性が示された。
19. 幼稚園児のレジリエンスに関する教諭と母親の評価ー幼児の意識との比較ー	単	2003年08月	日本教育心理学会第45回総会, 発表論文集, p663.	幼稚園児58名とその母親および担当教諭を対象として、幼児のレジリエンスについて聞きとり調査および質問紙調査を行ない、母親と教諭による幼児のレジリエンス評価に、幼児自身の意識が反映されているか検討を行った。その結果、レジリエンス資源と楽観に関して三者の評価は一致しているが、レジリエンス意欲に関しては、母親の評価のみ幼児の意識を反映していることが示された。
20. Modification of Mother-Child Stress Interaction	単	2000年08月	The 27th International Congress of Psychology, Abstract, p213.	学術論文「母親と幼児の心理的ストレス相互作用への介入の試み」をまとめるにあたり、幼稚園児をもつ母親への臨床的面接を通じて、母親の子どものストレス反応についての認知変容を試みた事例研究結果と考察を発表した。
21. 幼児のストレス・マネジメントープログラム作成の試みー	単	1999年09月	日本心理学会第63回大会, 発表論文集, p1059	学術論文「幼児期の災害ストレスに対するマネジメント研究ー就学前から就学後にかけての精神的健康に災害が及ぼす影響ー」をまとめるにあたって、保育活動の中で実施できるストレスマネジメント教育としてリラクゼーションプログラムの開発を行ない、幼児自身を対象としたプログラム実施の結果と考察を発表した。
22. 女子短大生における母親の認知(7)ー職業選択時の情報源としての母親ー	共	1998年10月	日本心理学会第62回大会, 発表論文集, p279.	浦上昌則・小花和尚子 学会発表「女子短大生における母親の認知(6)ー母親の期待に対する認知と生き生きー」の継続研究。娘による母親の認知を通じて、娘が行う職業選択および進路選択の過程について発表した。
23. Stress Responses in Children and Mothers Following the Kobe Earthquake	単	1998年08月	The 24th International Congress of Applied Psychology Session 2 007.	阪神・淡路大震災後3年間にわたって、幼稚園児および母親を対象として行った第1回~第4回災害ストレス調査のノンパラメトリック解析分析結果より、震災後3年間に多くのストレス症状は軽減されたが、その軽減率は、震災による物理的・精神的なダメージの程度よりも母親のストレス症状と関連していること、また幼児は成人よりも、よりレジリエントであることを発表した。
24. 幼児におけるストレスマネジメント	単	1997年05月	日本保育学会第51回大会 研究論文集 pp968-969.	学術論文「幼児期におけるストレス・マネジメント教育の試み」をまとめるにあたって、神戸市内幼稚園において試行した幼稚園児用ストレスマネジメントプログラムの実験結果と考察を発表した。
25. 震災による幼稚園教諭のストレス	共	1996年10月	日本教育心理学会第38回総会 発表論文集 p262.	濱名浩・小花和尚子・高橋秀典 担当: データ収集, データ分析, 抄録作成 阪神・淡路大震災後の神戸市・尼崎市内幼稚園24園に勤務した教諭353名を対象として、1996年2月に行った災害ストレス調査結果より、災害ストレスと勤務意欲の関連を検討し発表した。
26. 女子短大生における母親の認知(5)ー母親の期待に対する認知ー	共	1996年09月	日本心理学会第60回大会 発表論文集 p304.	浦上昌則・小花和尚子 学会発表「女子短大生における母親の認知(4)ー対人関係の認知構造と生き生きー」の継続研究。娘による母親の認知を通じて、母から娘へライフスタイル・価値観に関する意識が継承される過程を検討し発表した。
27. 女子短大生における母親の認知(6)ー母親の期待に対する認知と	共	1996年09月	日本心理学会第60回大会 発表論文集 p305.	小花和尚子・浦上昌則 「女子短大生における母親の認知(5)ー母親の期待



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
生き生きー 28. Disaster Stress of Children and Mothers after Kobe Earthquake	単	1996年08月	The XXVI International Congress of Psychology, Abstract p213.	に対する認知ー」に続く連続発表。 阪神・淡路大震災後の幼稚園児および母親への第1回ストレス調査結果より、大都市災害後に日本の幼児・母親が示した災害ストレスの特徴、およびその発現への影響要因を報告した。
<b>3. 総説</b>				
1. 非日常的な出来事とその後の変化：阪神淡路大震災の体験児童のストレス	単	2014年8月	児童心理, Vol. 68 No. 11, 52-57.	教育現場の教師および児童の親を対象として、児童の「レジリエンス」が発揮された具体例を、阪神淡路大震災後のストレス調査結果から紹介し、そのメカニズムについて解説した。
2. 自己肯定感とレジリエンス	単	2014年6月	児童心理, Vol. 68 No. 8, 26-32.	教育現場の教師および児童の親を対象として、「レジリエンス」概念の解説を行い、自己肯定感の育成が、レジリエンス育成の基盤となることを実践例を挙げながら解説した。
3. リジリエントな社会とは	単	2012年3月	日本建築学会建築雑誌, Vol. 127, 22-23.	心理学の側面から見たレジリエンスを解説し、レジリエンスが発揮されるコミュニティの在り方について総説した。
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 青年期発達百科事典 「レジリエンス」	共	2014年3月	青年期発達百科事典 第1巻 発達の定型プロセス 丸善出版 pp430-439	子安増生・二宮克美（監訳）青年期発達百科事典編集委員会（編）青年期発達百科事典 第1巻 発達の定型プロセス 担当項：レジリエンス Resnick, M. D., & Taliaferro, L. A. (2011). Resilience. In B. Bradford, & M. J. Prinstein (Eds.) Encyclopedia of Adolescence, Vol. 1 Normative process in development. Academic Press. を翻訳した。
2. 発達リスク要因の解明 4	共	2012年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 5, 47-49.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝・森安真由美 担当：論文執筆, 調査内容検討, データ分析 これまで継続的に行なってきた発達に関わるリスク要因の解明に関して集約し、成果と課題を報告した。
3. 発達リスク要因の解明 3	共	2011年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 4, 25-31.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝・森安真由美 担当：調査内容検討, データ分析, 論文執筆 「発達リスク要因の解明 2」の継続研究報告。発達に関わるリスク要因の解明に向けて、健常児および障害を診断された子どもの養育者を対象に、子どもの行動に見られるdifficult behavior (扱いが難しい行動)に関する説明帰属スタイルを調査し、診断の有無および発達障害リスクの有無による比較を行い、報告した。
4. 幼児期の災害ストレス調査から	共	2011年3月	日本発達心理学会第23回大会 大会委員会主催公募シンポジウム「発達心理学は大災害とどう向き合ってきたか」	企画：齊藤誠一 話題提供：小花和 Wright 尚子・西田裕紀子・則定百合子 指定討論：森岡正芳・神藤貴昭 話題提供者として、阪神淡路大震災後の調査結果をもとに発表した。
5. 発達リスク要因の解明 2	共	2010年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 3, 43-47.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝 担当：論文執筆, 調査内容検討, データ分析 「発達リスク要因の解明 1」の継続研究報告。発達に関わるリスク要因の解明に向けて、発達障害のハイリスク児の養育者を対象に、子どもの行動に見られるdifficult behavior (扱いが難しい行動)に関する説明帰属スタイルと養育者のストレス、およびハイリスク傾向にある障害の内容との関連を検討した結果を報告した。
6. 保育者の気になる子どものとらえ方ー発達臨床心理学用語に対する認識との関連ー	共	2010年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 3, 79-84.	小花和 Wright 尚子・佐方哲彦・井上雅勝・井関良美・則定百合子・羽川可奈子 担当：論文執筆, データ分析 軽度発達障害児に診断の機会を与えるきっかけは、保育士によってとらえられる「気になる行動」であるが、一方では、保育士の多くが発達障害に関連する用語を正しく理解していないことが指摘されている。本研究では、保育者による気になる子どもの特徴と発達臨床心理学用語に対する認識の関連を検討した。分析の結果、保育者が「気になる」行動としてとらえる行動側面、および発達臨床心理学用語を理解しようとする意識には、保育経験の長さによって異なることが明らかとなった。
7. 心理学英和・和英基本用語集	共	2010年3月	福村出版	小花和 Wright 尚子・安藤明人・佐方哲彦（編著） 著者：安藤明人・井上雅勝・小花和 Wright 尚子・齊藤文夫・佐方哲彦・杉村吾吾・松村憲一

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
8. 幼児期の楽観性育成を支える養育環境と生理的要因の関連	単	2009年6月	平成19年度～20年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究（C））19530605	心理学を専攻する大学生を対象として、一般の英和辞書には載っていない心理学専門用語1644、心理学者名223をとりあげ、その英和と和英辞書を作成した。 本研究では、帰属スタイルを通じて把握される幼児の楽観性には、養育者による子どもの帰属スタイルについての認知と養育者自身の楽観性が関連することを示した。また、幼児の全唾液αアマラーゼ、舌下腺唾液中αアマラーゼには日内変動があり、その活性値には個人差が大きく反映されていること、および、舌下腺唾液中αアマラーゼには、子どもの性と帰属スタイルを通じて把握される楽観性が関連することを示した。
9. 発達リスク要因の解明1	共	2009年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 2, 77-82.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝・森安真由美 担当：論文執筆、調査内容検討 「心理的弾力性の育成を阻む要因の解明」の継続研究報告。発達に関わるリスク要因の解明に向けて、健常児の養育者を対象に、子どもの行動に見られるdifficult behavior（扱いが難しい行動）に関する説明帰属スタイル、養育者のストレス、養育者による子どもの気質の認知、および子どもの行動特徴を調査し、子どもの行動特徴に関連する養育者の要因のモデル化を行った。
10. 発達リスク評価法の開発	共	2009年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 2, 138-141.	佐方哲彦・小花和 Wright 尚子・羽川可奈子 担当：調査内容検討 保育者による発達リスク児のとらえ方を自由記述による回答から質的に分析した。多動性・衝動性、攻撃性などの行動側面と、ことば・コミュニケーションの側面から分析を行った結果、それらの障害の内容によって、保育者が子どもをとらえる視点は異なることが明らかとなった。
11. 心理的弾力性の育成を阻む要因の解明—発達リスク児と健常児を対象とした尺度の検討—	共	2008年3月	武庫川女子大学発達支援学術研究センター研究成果報告書, Vol. 1, 65-73.	小花和 Wright 尚子・井上雅勝 担当：論文執筆、データ収集、データ分析 健常児および障害を診断された子どもの発達に関わるリスク要因の解明に向けて、養育者を対象に実施する尺度の検討を行った。主として発達障害をもつ子どもの養育者を対象とした国内の18の先行研究レビューから、養育者の抑うつとストレス、養育者の親効力感、養育者による子どもの気質の認知、養育者による子どもの行動の帰属説明スタイルを測定する尺度を選定し、その妥当性について概念定義より考察した。
12. 家族のストレス	共	2006年3月	医学書院 包括的ストレスマネジメント pp259-276	Greenberg, J.S.による Comprehensive Stress Management, 6th Edition (McGraw-Hill, 1999年出版)を翻訳した。(服部祥子・山田富美雄(監訳) 浅田博・石井昌明・小花和 Wright 尚子ほか29名) 担当：第17章「家族のストレス」
13. 英語へのストレス・コーピング	共	2001年11月	日本心理学会第65回大会ワークショップ	祐宗省三企画 話題提供：小花和 Wright 尚子・陳省仁・Timothy Leuers・大谷朗子・田中佑子 ストレス研究の視点から、日本国内における英会話学習の諸問題について検討し、ストレス生起モデルによるストレス発生の理解と、コーピングとしてのレジリエンス概念の適用について提言を行った。
14. 子どものストレス：主として幼児・児童をめぐって 話題提供	共	1998年3月	日本発達心理学会第9回大会ミニシンポジウム	祐宗省三企画 話題提供：小花和尚子・長根光男・川原誠司 客観的に自己の抱えるストレスを理解することがむずかしい幼児・児童が、自らストレスに気づき、それに対処していくためには、どのような保育・教育が必要なのか、提言を行なった。
15. 今後の災害ストレス研究とケア活動への提言	共	1997年3月	日本発達心理学会第8回大会ラウンドテーブル	山田富美雄・大野太郎企画 話題提供：島井哲志・小花和尚子・瀬戸章子・浅井泉・百々尚美 阪神・淡路大震災後2年間にわたる幼稚園児および母親へのストレス調査結果を報告し、調査時における早期ケア活動の重要性、および長期にわたるケア活動での留意点について提言を行った。
16. 震災と発達心理学—2年を過ぎて見えてきたこと—	共	1997年3月	日本発達心理学会第8回大会ラウンドテーブル	小石寛文企画 話題提供：小花和尚子・齋藤誠一・小泉直子・前川あさ美 阪神・淡路大震災後2年間にわたる幼稚園児および母親へのストレス調査結果を報告し、災害心理を調査する研究者に要求される視点、および調査対象者との関わり方について提言を行った。
17. ストレス・マネジメント：PTSDの測定を中心として	共	1996年8月	日本心理学会第60回大会ワークショップ	祐宗省三ほか企画 話題提供：坂野雄二・島井哲志・小花和尚子 阪神淡路大震災後のストレス調査結果より、自然災害発生時における母子ストレスマネジメントの重要性および具体的なサポート介入について解説し、今後の幼児期のPTSD研究の方向性を提言した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 乳幼児期の個体・環境要因と児童期の社会的行動の生物学的基盤についてのコホート研究	共	2015年～	科学研究費補助金 基盤研究(B)	研究分担者 (研究代表者：河合優年)
2. 乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究	共	2010年～2013年	科学研究費補助金 基盤研究(A)	研究分担者 (研究代表者：河合優年)
3. 幼児期の楽観性育成を支える養育環境と生理的要因の関連	共	2007年～2008年	科学研究費補助金 基盤研究(C)	研究代表者
4. 幼児期の心理的ストレスを軽減する楽観性の研究—弾力性と非現実性の検討—	共	2005年～2006年	科学研究費補助金 基盤研究(C)	研究代表者
5. 幼児期の楽観性評定方法の検討	単	2004年	武庫川女子大学 平成16年度科学研究費補助金 学内奨励金	
6. 幼児期のレジリエンス	単	2003年	科学研究費補助金 研究成果公開促進費 学術図書	
7. 幼児期におけるレジリエンス	単	2002年	科学研究費補助金 若手研究(B)	
8. 幼児期におけるレジリエンス	単	2001年	科学研究費補助金 奨励研究(A)	
9. 就学前幼児におけるストレス・マネジメントの効果	単	1998年～1999年	科学研究費補助金 奨励研究(A)	

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本心理学会 日本教育心理学会 日本発達心理学会 International Society for the Study of Behavioral Development 日本グループ・ダイナミクス学会 日本生理人類学会 国際応用心理学会 日本保育学会